

平成12年1月11日

雑司ヶ谷遺跡から江戸時代の一括銭出土

昨年末の12月1日から17日にかけて行なわれた雑司ヶ谷遺跡・岩井家地区（雑司が谷3-15-24）の発掘調査で、木製の桶と思われる容器から江戸時代の銭貨87枚が発見された。

雑司が谷鬼子母神法明寺に隣接する雑司ヶ谷遺跡は、江戸時代に子授け・安産祈願の参詣人で賑わった鬼子母神参道沿いの門前町にあたる。また寛文年中（1661-72）以降、参詣人の急増により茶屋町として繁栄した地域で、これまでの発掘調査により、全国的にも珍しい江戸時代の茶屋町の実像が明らかになってきている。

今回の発掘調査が行なわれた岩井家地区は、江戸時代の絵図等によると、鬼子母神参道沿いの茶屋や門前町屋が建ち並んでいた場所。この地区の発掘調査では、建物・土間・井戸の他、地下室・ゴミ穴・生垣などの遺構が発見されており、また、18世紀から19世紀にかけての時間的な経過の中で、敷地の地割りの変化、土地利用のあり方の変化も明らかにされている。

今回発見された一括銭の遺構は、19世紀前半の敷地割りで、参道側から見て裏手となる敷地の境界にあたる生垣の下から発見された。桶と思われる木製容器に入れられていた一括銭は全部で87枚だったが、桶の半分が失われていることからみて、本来はもっと多くの銭があったのではないかと推測される。発見された銭のうち、最も古いものは初鑄年が寛永13（1636）年の古寛永通宝で、江戸時代に最初に鑄造されたことで知られている。一番枚数の多いのは、文政4（1821）年初鑄の寛永通宝（波銭）11枚で、最も年代の新しいものと考えられる安政4（1857）年鑄造のものを含めて、寛永通宝（波銭）が全部で62枚に及ぶ。波銭は普通の寛永通宝より一回り大きく、四文銭として流通していたもの。この他に、小判型をした天保通宝や寛永通宝の鉄銭などが見られ、こうした銭の鑄造年から、一括銭の埋められた時期は、江戸時代の終わり頃と推定される。

一括銭が埋められた由来については、敷地の居住者が財産を埋めた「埋蔵銭」とも考えられるが、敷地境の生垣下から発見されたことから、中世以来続いている敷地境界を結界するという呪術的な意味合いをもって埋められた「埋納銭」とも考えられる。現時点では明確な判断はできないが、発掘を担当した学芸員は、「こうした小さな区域での発掘調査の積み重ねの中でこそ、地域の歴史や文化の有り様がすこしづつ解明されていく」と調査の意義について語っている。

詳細:豊島区遺跡調査会